

松本市内出土の灰釉陶器 (第29図)

長野県内から出土する灰釉陶器には猿投・尾北・東濃・美濃須衛などの産地のものがあるが、言うまでもなく東濃産が最も多い。1981年の愛知陶磁資料館でのシンポジウム以降、灰釉陶器の編年は大きく変化し、これに伴ない折戸53号窯式期に代表される猿投窯での編年のほかに東濃窯での編年も整備された。今回、檜崎彰一、田口昭二、斉藤孝正の3氏から東濃産の灰釉陶器について貴重な御教示を得ることが出来たため、浅学をも顧ず東濃産の編年^(註)に従って最近の松本市内の発掘調査で得られた資料を概観したいと思う。

黒笹14号窯式期 下神遺跡第12号住居址出土の猿投産の平瓶(12)がある。この時期、東濃での灰釉陶器生産は開始されておらず、現時点で該期の資料はこの平瓶1点のみである。

光ヶ丘1号窯式期 北方遺跡第1号住居址出土の碗(1)、同2号住居址出土の小瓶(11)、同5号住居址出土の碗(3)などがある。碗は底部から口縁部付近に至るヘラケズリによって薄く仕上げられ、口端部はまるく曲げられている。底部はヘラケズリ、ナデ調整によって糸切り痕が消されており、外面が内側に屈曲する高台(三日月高台)が付く。釉は一筆のハケぬりとなっており、見込みにも施釉される場合がある。本窯式は猿投の黒笹90号窯式に併行する。

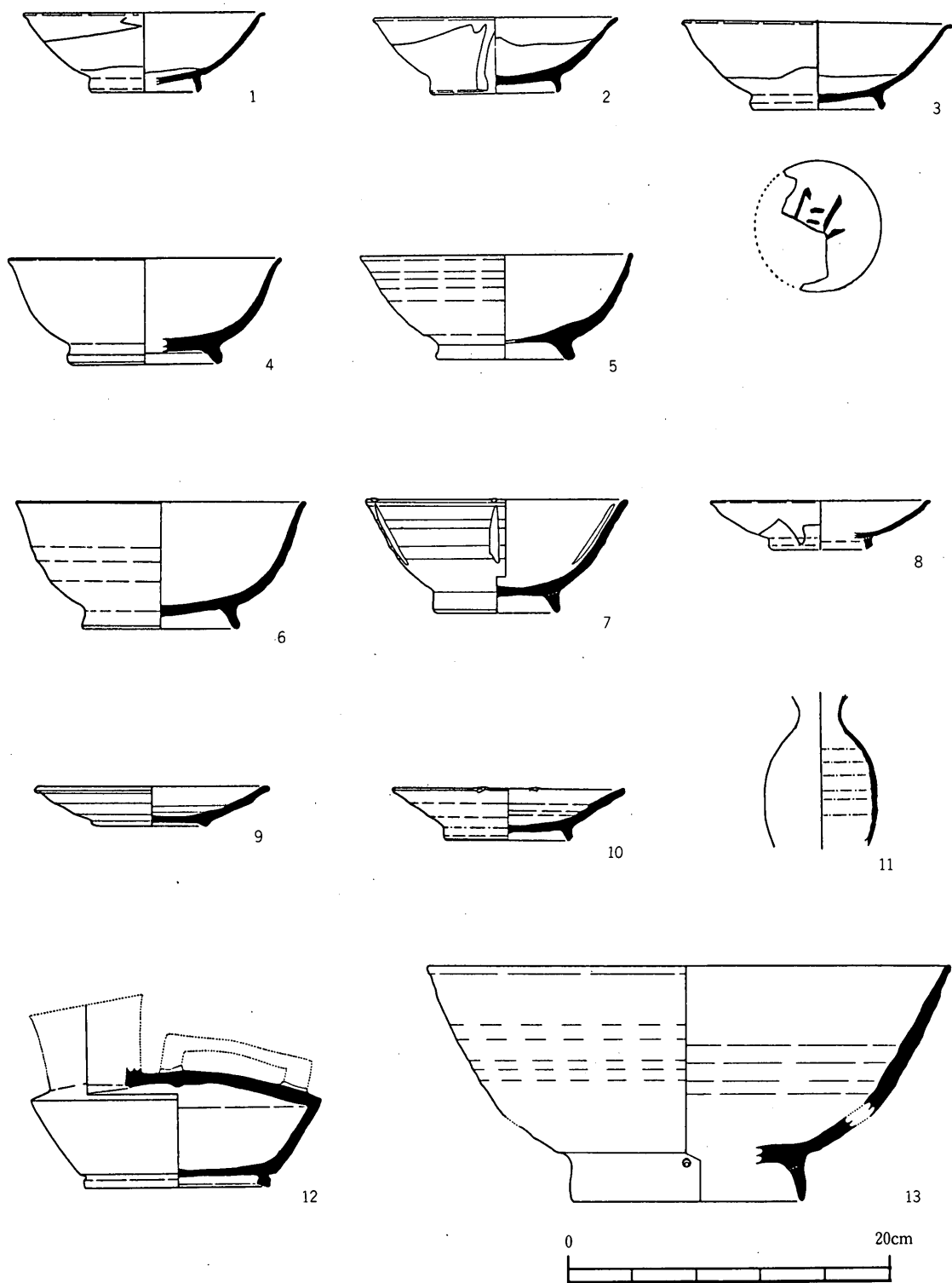
大原2号窯式期 南栗遺跡第6号住居址出土の碗(2)、島内1号住居址出土の皿(8)、が該当する。碗では釉がつけがけとなり、ヘラケズリも底部から体部下半までとなる。底部の糸切り痕はヘラケズリ、ナデ調整によって消され、三日月高台が付くものが多い。形態的には前窯式と同様であり、口端をつまみ出す点などかなり似ている。本窯式は猿投の折戸53号窯式期に相当する。

虎溪山1号窯式期 神戸1号住居址出土の輪花皿(10)、同20号墓址出土の碗(6)、輪花碗(7)、皿(9)、鉢(13)、広口瓶などがある。碗はいわゆる深碗が盛行する。底部から腹部までヘラケズリされ、糸切り痕は消されている。釉はつけがけである。輪花碗はヘラまたはユビで長く胴部下半まで輪花が施されている。鉢は本窯式期に特徴的な器種である。皿は底部に糸切り痕を残すものもあるが高台は古い様相を残している。本窯式は猿投の東山72号窯式期に併行する。

丸石2号窯式期 神戸遺跡1号住居址出土の碗(4)、同第2号住居址出土の碗(5)、同第20号墓址出土の皿などがある。碗は前窯式に比してやや浅くなり、口縁部もやや外反ぎみとなる。底部に糸切り痕を残すものが多く、ヘラケズリも高台接合部付近だけに施されるものが多くなる。皿では高台が断面三角形を呈するものが多く、糸切り痕を残すものが殆んどで明らかに手抜き傾向が窺われる。本窯式期は猿投の百代寺窯式期に相当するが本窯式期をもって灰釉陶器の生産は終了し以後山茶碗へと変化する。

(田中正治郎)

(注) 土岐市陶磁歴史館報Ⅱ 1983 田口昭二による。



第29図 松本市内出土の灰釉陶器